

<b>Title</b>	一人ぼっちは本当に怖いのか：2012 年大学生調査結果より
<b>Author(s)</b>	横山, 寿世理
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 第 27 巻第 1 号, 2014.10 : 155-167
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5071">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5071</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 一人ぼっちは本当に怖いのか

——2012 年大学生調査結果より——

横 山 寿世理

## 抄 録

本稿では、大学生の主体的なコミュニケーション能力の豊かさが、友人関係への依存傾向に隠蔽されていることを実証的に明らかにする。近年の研究には、ケータイ・メールの送受信によって維持される若者の友人関係依存と、一人になることへの恐怖を取り上げたものがある。けれども、2012 年に聖学院大学の学生 331 人を対象とした調査では、自分からイベント企画する傾向と、会話を自ら牽引する傾向が浮き彫りになった。本稿では、この聖学院大学での学生調査結果を通して、ただ過酷な友人関係に埋没するだけではない大学生像が実証される。

キーワード；大学生，友人関係，LINE，コミュニケーション

## はじめに

2014 年 4 月、『朝日新聞』は LINE の利用者が世界で 4 億人を超えたと報じた<sup>(1)</sup>。サービス開始後わずか 3 年足らずで 4 億人の利用者を獲得した LINE の急成長は、同じソーシャル・ネット・ワーキングサービス（以下、SNS と略記）の一つである Facebook を上回ると言われる。

事実、総務省『平成 26 年版情報通信白書』によれば、LINE は 20 代の利用率が最も高く 8 割を超えており、10～20 代が中心的な利用者となっている<sup>(2)</sup>。また、同白書からは、スマートフォン購入により SNS 利用頻度が増加することも明らかになり<sup>(3)</sup>、LINE にはスマートフォンが必須であることを窺わせる。

けれども、その LINE の急拡大とともに、注目されるのが「つながり依存」と言い換えられるネット依存であるだろう<sup>(4)</sup>。つながり依存は「常にインターネットに触れていないと不安を感じる」ネット依存をさらに限定したものであり、メッセージの送受信にはじまり、SNS 上で展開される友人関係の維持に精神や時間を費やすことになる。

特に深刻なのは、LINE 上での仲間はずれや「いじめ」であるだろう<sup>(5)</sup>。中高生にはじまり、大学

生もこのLINEを友人関係の維持に使用していると考えられる。大学入学前からSNSで入学後の友人を探し、入学式にはすでに友人との関係がある程度できているという現状がある。つまり、これらのLINEをめぐる現状は、友人とのつながりに埋没する若者像を示していると考えられる。

そこで、本稿では、近年の友人関係を象徴する「いじり」、大学生のケータイ依存について、これまでの研究を整理して、その中からLINEを利用する大学生が本当に過密な友人関係という「つながり」に依存して、コミュニケーション能力を高めることに振り回され、「一人ぼっち」を恐れているのかを明らかにする。

## 1. 「いじり」と「つながり依存」

1980年代半ばの日本で、生徒間のいじめが社会問題化されたと言われている。この時代のいじめは、いじめの被害者、いじめの加害者、いじめをはやし立てる観客、傍観しているだけの無関心者からなる「いじめの四層構造」によって説明された<sup>(6)</sup>。

けれども、土井隆義は、現代のいじめはその「第三層である観客の立場の生徒がほとんど見当たらなくなっている」<sup>(7)</sup>と指摘する。この観客の消失は、周囲の人間と衝突することを避け、相手から反感を買わないことを常に心がけるという「優しい関係」が強く要求されるようになったことによる<sup>(8)</sup>と土井は見ている。

その「優しい関係」は、従来のいじめの四層構造のような加害と被害との関係が表面化することを避け、「いじめの外面を遊びのモードで覆うことで、その人間関係の軋轢を巧みに隠そうとする」<sup>(9)</sup>。つまり、いじめにおける4つの立場が表面化することを避けて、「いじり」と呼ばれる相互的な「遊びのフレーム」を乗り切ることで、人間関係の軋轢を回避するのだと言う。土井は、この遊びフレームの乗り切り方が、テレビで互いに「いじり」あうことによって観客の笑いをとるお笑い芸人の言動を教科書としている、と指摘する。人間関係の軋轢が表面化することを避けるからこそ、「いじり」における〈いじられる側〉と〈いじる側〉は容易に立場を入れ替え、流動的なものになる<sup>(10)</sup>。

このような関係は、現代のないじめである「いじり」に限ったものではないだろう。「いじり」という形ではなくとも、軋轢を伴うような人間関係は回避され、相手を傷つけず自分も傷つかない優しい関係が、現代の若者の友人関係を維持しているのではないだろうか。

また、鈴木謙介は、若者が始終メールのやりとりする「ケータイ依存」に陥る「合理的な理由」を明らかにする<sup>(11)</sup>。鈴木は、日本に限らず世界的に、ケータイの中でも文字通信機能である「メールを通じて友人と『繋がりうる』状態を維持しておくことが、『ケータイ依存』の大きな要因になっている」と予想する<sup>(12)</sup>。

その上で、鈴木は、ケータイで友人と繋がろうとする「合理的な理由」を、2006年から2007年に

かけて首都圏・関西圏の複数の大学で行った学生調査結果（以下、「首都圏関西圏大学生調査」と略記）に求めている<sup>(13)</sup>。その首都圏関西圏大学生調査結果によれば、ケータイメールを1日に10通以上も送受信する学生は、頻繁に着信を確認したり、電波状況の悪さで不安になったり、メールをすぐに返信する傾向にあることがわかる。さらに、そのようなケータイ依存学生は、今後自分が孤独になってしまうかもしれないということに対する恐怖が強いと言う。というのは、首都圏関西圏大学生調査では孤独に対する恐怖を、「まわりから、友だちがいないように見られるのは耐えられない」「自分のふるまいが場違いではないかと気になることがある」「友人や知人に、悪口を言われているかもしれないと不安だ」という質問で明らかにしているからである。この3つ指標は、ケータイ依存学生において高い関連を示している。つまり、ケータイ依存学生が、孤独になってしまうことに対する恐怖を抱いているということになる。

鈴木は、若者の友人関係に関する先行研究を参照しながら、場面に応じて関係や人格（キャラ）を切り替える「選択的関係」<sup>(14)</sup>が、この孤独に対する恐怖へと結びついているのではないかと考え、次のように述べる。

友だちとは密接に付き合いたいが、人間関係を抜けもしたい。しかし、人間関係を抜けようとするとキャラを切り替えて相手に同調しようとしなければならなくなる。結果的にその「同調」がうまくいっているのかどうかに対する不安が生まれ、「本当は、自分は仲間だと思われていないのではないか」という恐怖に繋がっているのではないか<sup>(15)</sup>。

孤独恐怖につながる同調については、土井も指摘している<sup>(16)</sup>。土井は、「優しい関係」を維持するために、場の空気を乱して相手に負担をかけることのないように誰もがコミュニケーションに没入しなければならないと指摘する。これは、「過同調」を互いに煽り合った「優しい関係」なのである。

大学生たちが、「過同調」によって成り立つ「優しい関係」を自分が崩壊させ、コミュニケーションを破壊させていないかと不安になるのも無理もない。その不安の先に、尾木直樹が言う「便所飯」<sup>(17)</sup>があるとすれば、現在の大学生の友人関係はまさに『友だち地獄』である。つまり、「人のいるところで食事をするのが嫌なのではなく、“一人で食事をしているところを見られたくない”という心理が強い」<sup>(18)</sup>ため、昼食をトイレで済ませる学生も『友だち地獄』を味わっていることになる。言い換えると、一人ぼっちを恐れ入ることになるのである。

このような大学生の友人関係に関する研究動向を踏まえて、本稿では2012年に聖学院大学において実施した調査結果からも、大学生たちが一人ぼっちを恐れているのかを確かめたい。けれども結果として明らかになるのは、意外にも大学生の友人関係に対する強さであり、主体的なコミュニケーション能力である。

## 2. 調査目的と概要

本調査は、聖学院大学の演習科目の一環として、学生に社会調査を実習させるために実施した。その中で、調査を企画した学生たちが本調査テーマに選んだのは、「ゆとり教育世代のコミュニケーション能力」の実態把握であった。調査主体となった学生たち自身が「ゆとり教育世代」であり、世間からの批判にさらされる中で、同じくゆとり教育世代である2012年時点の大学生たちはコミュニケーション能力を失ってはいないという仮説を基に本調査を企画した。

調査実施時期は2012年11月12日から16日までの5日間、聖学院大学で実施される6つの講義において、著者のゼミ生が実査を行う講義の受講生に対して一斉に調査票を配布・回収する集合的調査法によって実施した。実査は、当時の学部構成比に照らして政治経済学部2講義、人文学部2講義、人間福祉学部2講義において実施し、特定の学部に偏らないように配慮した<sup>(19)</sup>。

回収できた調査票は全部で348票、そのうち有効票は331票（有効回答率95.1%）であった。実査を講義開始前に実施した場合と50名程度の少人数講義において回収した調査票にはほとんど無効票がなく、反対に、講義終了後に実施した場合と大人数講義における実査で無効票が増えるという結果となった。なお、調査の実施にあたっては、聖学院大学研究倫理審査委員会に調査実施を申請して、調査倫理に配慮した。

調査票の目的は、本稿の目的とは異なるテーマ「ゆとり教育世代のコミュニケーション能力」に基づき行われた。本調査は、コミュニケーション能力とゆとり教育世代（以下、「ゆとり世代」）の特徴を示す指標（変数）を次のように想定して、ゆとり世代が「豊かな」コミュニケーション能力をもつという仮説で設計された。

本調査で想定したコミュニケーション能力とは、面識のない人とも自ら会話を継続させる能力であり、会話を展開させる能力、異性という他者と臆することなく接することができるかといった能力などである。／また、ゆとり教育世代の特徴として想定したのは、自己主張の強さや他者に関心であること、付き合いの悪さ、気配りができないこと、諦めの早さなどであり、これらの特徴が前述のコミュニケーション能力の低下を招いていると一般的に思われているのではないかと考えた。この一般的なイメージは、実際のゆとり教育世代である大学生たちに、果たして当てはまることなのか。そのことを確かめるのが、本調査のねらいとなった<sup>(20)</sup>。

その上で、高いゆとり世代指標を示す学生ほど、コミュニケーション能力指標が低ければ一般的なイメージは妥当であることが実証されることになるが、この傾向が実証されなければ、本調査の仮説であるゆとり世代のコミュニケーション能力の高さが裏付けられることになるはずであった。

けれども、ゆとり世代ほどコミュニケーション能力が低いという仮説は反証されなかった。

調査票は 32 問の選択式設問とフェイスシートから構成した。その設問には、ゆとり世代を示す変数と、コミュニケーション能力を示す変数、そして関連すると予想したネット依存（メディア依存）を示す変数を準備した<sup>(21)</sup>。

本稿では、ゼミ生たちの仮説とは異なり、特に SNS の中でも、利用率が高い LINE を利用する学生の傾向から、本当に大学生が過密な友人関係やコミュニケーション能力を高めることに振り回され、いわば「一人ぼっち」を恐れているのかを明らかにしたい。その結論として、このような「一人ぼっち」傾向は、聖学院大学学生において別の様相を示していることを論じることになる。

### 3. SNS は友人関係依存をもたらすのか

まず、聖学院大学の学生のあいだで利用率がほぼ半数となった SNS であった Twitter, mixi, LINE について、その利用率を示したい。図 1 のとおり、LINE だけが他の SNS よりも 10% 程度高い利用率を示している。近年、LINE 利用に関する問題が取りざたされる中で、聖学院大学においても同様の傾向が見出されるものと思われる。

当然予想されるのは、既読通知機能がある LINE の利用が、友人関係への依存を助長させる傾向である。実際に、LINE 利用と友人関係満足（Q15）との関連、LINE 利用と親友からの「いじり」（Q8）との関連、および LINE 利用と付き合いのよさ（Q11）との関連は、LINE を利用することが友人関係を促進させているように見受けられる。

図 2 のように、LINE を利用している学生の方が、友人関係に満足していることがわかる。確か

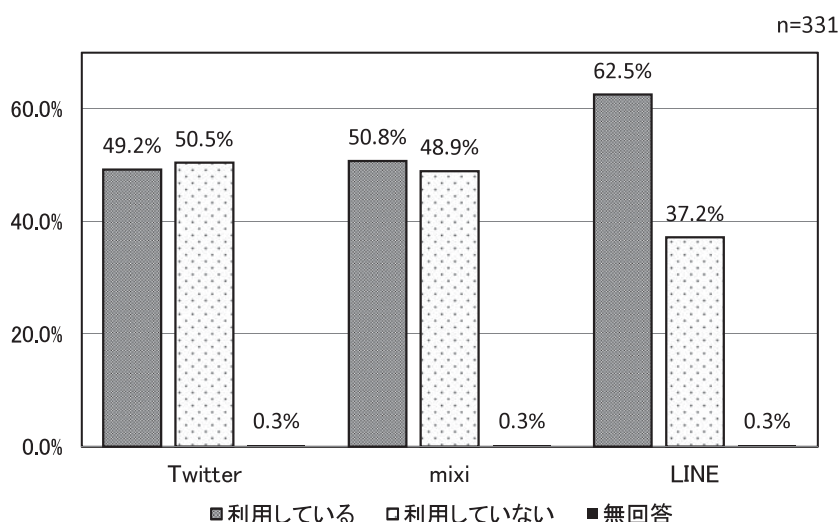


図 1 SNS 別の利用率

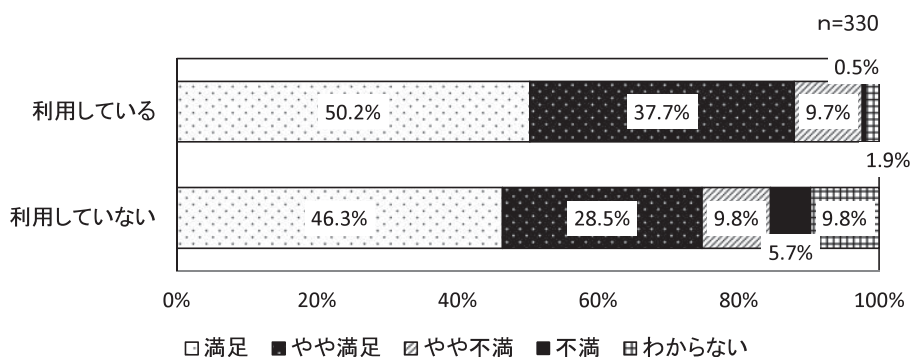


図2 LINE 利用別の友人関係満足

に、相対的にも聖学院大学の学生は友人関係に満足しているようだが、LINE を利用している学生の方が、友人関係に「やや満足」している学生を含めて、友人関係に満足している割合が10%ほど多い ( $p < .01$ )。LINE を使ったコミュニケーションが、友人関係の維持に有効に働いている状況とも見て取れる。

LINE 利用の有無によって異なる友人関係への反応は、次の結果からも指摘できる。図3のとおり、LINE を利用している学生の方が、親しい友人からいじられても平気だと答えているからである ( $p < .01$ ,  $V = .236$ )。

仮にLINE が友人関係依存をもたらすならば、土井の指摘のとおり、新しいいじめの形態である「いじり」について、「いじられている」学生と「いじっている」学生とが無自覚なまま「いじり」を助長する恐れがあるだろう。「いじり」の関係は、若者の新しいコミュニケーション形態であり、「お笑い」の「ボケ／突っ込み」を模しており、コミュニケーションの内容を問わず、自律的なコミュニケーションを発展させると考えられる。同時に、途切れることのない会話の成立が、友人関係の満足にもつながりやすいだろう。

この図3の結果は、LINE 利用が「いじり」という「遊びのフレーム」への参加を促進して、当事者たちの無自覚さによって過剰な「いじり」へと発展する傾向を示していると考えられる。

自律的なコミュニケーションの高進は、LINE 利用の有無と、「友人から誘われたら誘いに乗るか」(Q11)との関連においても確認できる(図4)。ここでは、友人からの誘いを受けるかについて尋ねている質問との関連を明らかにすることになるわけだが、この質問は学生の友人関係への依存傾向を確かめることができる。すなわち、「いじり」との関連と同じく、コミュニケーションの内容ではなく、「いじり／いじられる」といった友人との関係そのものに寄り掛かる指標として考えられる。

仮にLINE 利用学生が友人関係に依存する傾向にあるならば、LINE 利用学生の方が誘いを断らないはずである。つまり、LINE 利用学生の方が付き合いがよいはずである。結果は、この予想通り、LINE 利用学生の方が、友人からの誘いには応じる(「誘いに乗る」もしくは「どちらかという



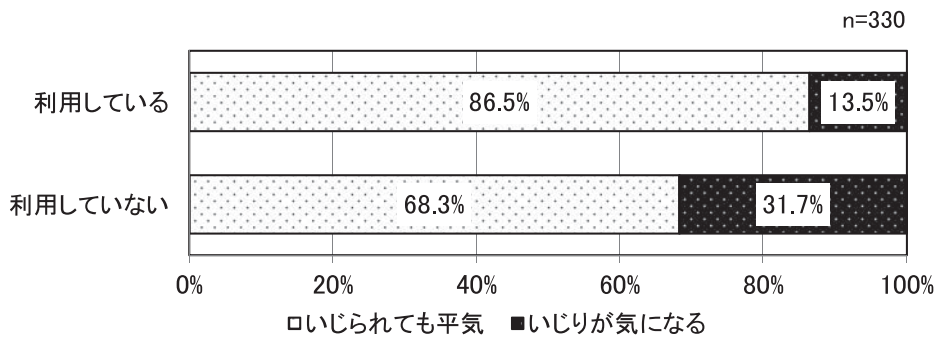


図3 LINE利用と親友からの「いじり」との関連

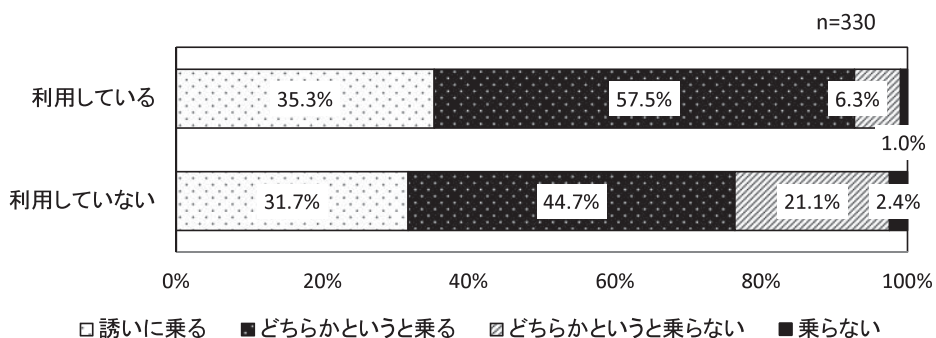


図4 LINE利用別の付き合いのよさ

と乗る」と答える）ことがわかる（図4）。

すなわち、LINE利用者の方が友人関係に満足して、「いじり／いじられる」関係に頼り、友人との付き合いもよいことがわかる。当然その関係から外れる一人ぼっちであることを嫌う傾向である。したがって、LINEが友人関係を維持する、あるいは友人関係に依存させるツールである可能性が窺える。

LINE利用学生は友人関係への依存度も高いと予想して、友人と外出・外食する際に自分の希望を「はっきり言う」か、それとも「友だちに決めてもらう」という質問（Q13）との連関を検証したが、統計的に有意な連関を見出すことはできなかった。つまり、LINE利用学生が意見というほど、自分の希望ですらはっきり友人に伝えずに、友人の決定を待つと予想したが、そのような傾向は本調査ではわからなかったことになる。

しかしながら、この友人関係の依存を窺わせるLINE利用の有無には、別の側面もある。

図5のとおり、LINE利用と企画力の有無についてであるが、LINE利用学生の方が、LINEを利用しない学生よりも20%以上多く「友人との遊びや飲み会などを自分から企画する」（Q9）と答えていることがわかる（ $p < .01$ ）。

ここまでの友人関係依存傾向から考えると、やや不思議な結果だと言える。なぜなら、自分から



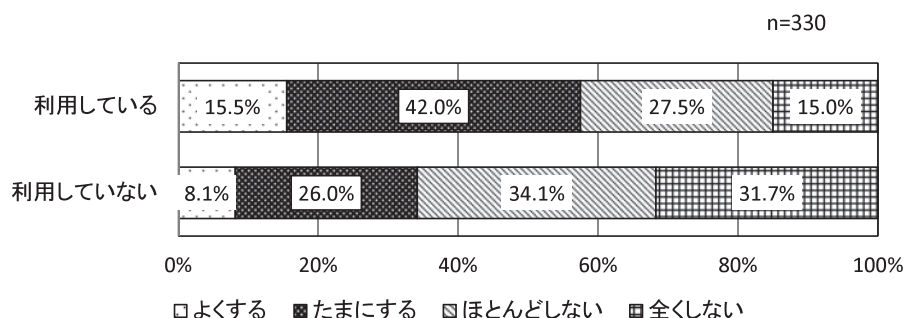


図5 LINE利用別のイベント企画の有無

イベントを企画するなどという行為は、多くの友人の希望をまとめ上げなければならず、学生たちにとってリスクの高い行為だと考えられるからである。つまり、図4のような友人との付き合いのよさに反する積極的な行為だと考えられるのである。それにも拘わらず、この図5の結果は、LINE利用学生の半数以上が友人との遊びや飲み会などを「自分から」企画する（「よくする」と「たまにする」両方を含む）と答えている。

さらに、企画力との関連の強さは、Twitter 利用 ( $V = .285$ ) や mixi 利用 ( $V = .262$ ) との方が LINE 利用 ( $V = .246$ ) よりも多少強く、自分から遊びや飲み会を企画するという積極性は、LINE 利用固有のものではないことになる。

したがって、LINE を利用する学生は、友人との付き合いもよく、その上「いじり」にも動じず、自分からの主体的な企画力も持ち合わせた実にアクティブで積極的な傾向を持ち合わせているということになる。

#### 4. ゆとり世代のコミュニケーション能力

それでは、そのアクティブで積極的な傾向とは、いったいどのような指標を示すものなのかを明らかにしたい。ここでは、『「いじり」における平静さ」「付き合いのよさ」「自分からの企画」が、共通して関連をもつ指標を取り上げる。その指標とは「会話の中で、自分から相手に話題を振ることができるか」どうか (Q6) である。この指標は、現代の「ゆとり世代」と呼ばれる大学生には苦手だと言われているコミュニケーション能力、もしくは会話を維持する能力を測るために、設計したものである。

まずは、自分から相手への話題提供と積極性を示す指標との関連を見てみたい (図6)。いずれも積極性を示す回答 (いじられても平気・自分から企画する・誘いに乗る) を行う学生の方が、自分からの話題提供ができる傾向を示している。というのは、親しい友人からいじられても平気な学生の方が、20%近く多く、自分から相手に話題をふることができると答えている。つまり、親友から

いじられても平気という友人関係への依存傾向は、自分からの話題提供との連関から、「いじり」に動じない平静さとして捉えられることになる。

このような友人関係に対する強さは、図7の結果からも窺い知ることができる。「友人からの誘いに乗る」と回答して付き合いの良さを明確に示すにしたがって、「会話の中で、自分からの話題をふる」ことができる学生が60.0%から70.0%，87.9%，そして90.0%へと増える（ $p < .01$ ）。「付き合いのよさ」は、「自分からの企画」と比べれば受身で消極的な傾向だと言える。そのような意味では、友人関係への依存傾向を示してもよいように思えるが、この「付き合いのよさ」ですら自分からの話題提供という積極性と関連していることがわかる。

また、図8の結果から、自分から遊びや飲み会などのイベントを企画する学生の方が、企画しない学生より、自分から相手に話題をふることができる傾向にあることがわかる。イベントの企画は、前述のとおり友人関係を充実させる要素であるが、同時にこれを破壊するリスクもある。その中で、自分から企画するという指標が、同じく友人関係崩壊のリスクを孕んだ「自分からの話をふる」という変数に高い連関を示していることは興味深い（ $V = .308$ ）。つまり、主体的な企画力を頻度が高くなるにつれて、主体的に会話を展開させる傾向を示しているのである。ここでの傾向は、無自覚的な「いじり」に象徴される友人関係への依存、すなわち自律的なコミュニケーション関係に埋没する大学生像には当てはまらないことになる。

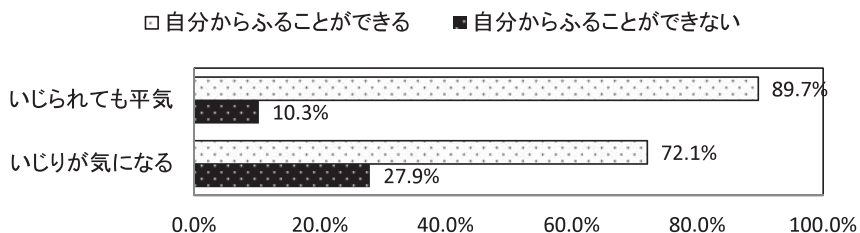


図6 親友からの「いじり」と相手への話題

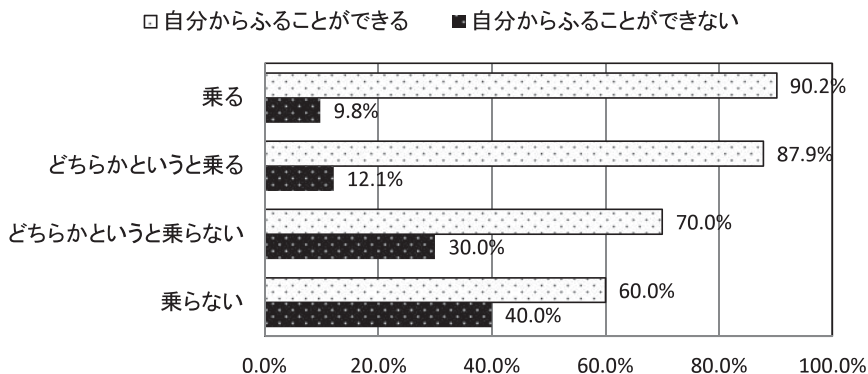


図7 付き合いのよさと相手への話題

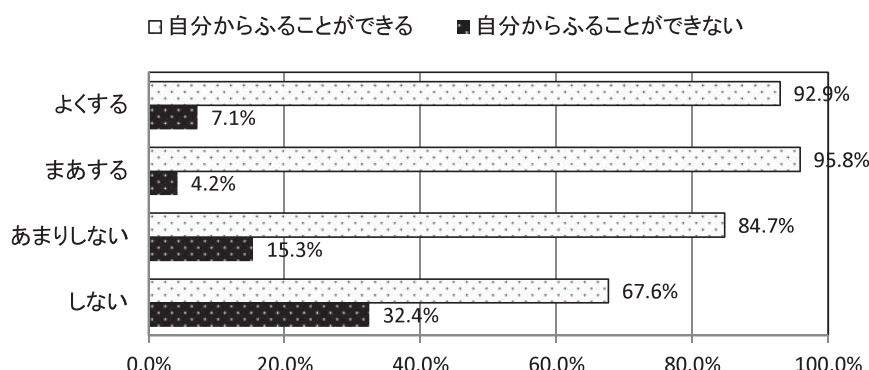


図8 イベント企画と相手への話題

『「いじり」における平静さ』と「付き合いのよさ」、そして「主体的な企画力」は、大学生が苦手だと言われる会話を主体的に展開していく傾向を示しており、常に友人の顔色を窺いながら仲間意識を繕おうとする大学生像ではなく、友人関係に振り回されているわけではない、主体的なコミュニケーション傾向を示していることになる。

したがって、積極性を示す指標は、会話の場面においても会話を先へと展開する傾向に下支えされていることになる。本調査では、聖学院大学の学生たちが友だちに依存して受身の会話、すなわちコミュニケーションに陥っているのではなく、自分からコミュニケーションを前進させる傾向を示している。

会話の展開力である「話題提供」指標が、積極性を示す指標と関連している。このことは、LINEを通じた友人関係への依存は、友人に振り回される学生像ではなく、積極的で、しかも会話力や人間関係構築力をもつ学生像を明らかにしていることになる。

## おわりに

聖学院大学での学生調査によって明らかになったのは、SNS、特にLINEを利用することが「いじり」を中心とした友人関係への依存へと結びつく傾向は、実は主体的なコミュニケーションを前進させるという傾向であった。LINE利用と、友人関係満足や「いじり」という遊びフレームへの参加、そして付き合いのよさだけと関連しているのであれば、このような傾向は顕在化しない。けれども、「いじり」との連関と付き合いの連関とは矛盾するイベントを企画する積極性との連関とともに、会話で自分から新しい話題をふるという主体的な会話力との関連を示すことで、友人関係への依存に隠蔽されたコミュニケーション能力を示している。

ただし、聖学院大学学生調査では、大学生一般の傾向をつかむことができない。また、友人関係依存に隠蔽されたコミュニケーション能力として会話展開力を示したわけだが、これは新しい話題

をふることができるという大学生自身の回答であり、実際に新たな会話の展開を可能にしているかどうかともわからず、独りよがりである可能性も否定できない。また、本稿で指摘した主体的なコミュニケーションが、主体的な友人関係依存を意味しているとも考えられる。LINE 利用が主体的なコミュニケーションと関連するという仮説をさらに実証する必要がある。

いずれにせよ、土井が指摘したような「友だち地獄」は、当事者である大学生の主体性によって自覚的に制御する可能性が示されたと言える。

## 注

- (1) 「LINE 利用者、4 億人突破 開始から 2 年 9 か月で」『朝日新聞』2014 年 4 月 2 日。
- (2) 総務省 (2013)『平成 26 年版情報通信白書』p. 138, (<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/index.html>) (2014.8.6 確認)
- (3) 同上書 p. 182.
- (4) 「つながり依存」は、NHK のクローズアップ現代で 2012 年 10 月 22 日に放送された「つながりから抜け出せない——ネットコミュニケーション依存」から着想を得ている。
- (5) 「つながる大学生 メールは時代遅れ!」『朝日新聞』2014 年 5 月 4 日。
- (6) 森田洋司・清永賢二『いじめ』金子書房 1986.
- (7) 土井隆義『友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房 2008 p. 23.
- (8) 同上書 pp. 16-17.
- (9) 同上書 pp. 31-32.
- (10) 同上書 pp. 20-21.
- (11) 鈴木謙介「なぜケータイにハマるのか——メールコミュニケーションの社会学」南田勝也・辻泉『文化社会学の視座——のめりこむメディア文化とそこにある日常の文化』ミネルヴァ書房 2008 p. 110.
- (12) 同上書 p. 111.
- (13) 同上書 pp. 119-125.
- (14) ここで鈴木は該当する先行研究として、辻大介「若者コミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛『子ども・青少年とコミュニケーション』シリーズ情報環境と社会心理 3 北樹出版 1999 をあげている。それ以外にも、浅野智彦『検証・若者の変貌——失われた 10 年の後に』勁草書房 2006 が若者の「選択的關係」に言及している。
- (15) 鈴木 前掲書 p. 124.
- (16) 土井 前掲書 pp. 46-48.
- (17) 尾木直樹・諸星裕『危機の大学論——日本の大学に未来はあるか?』角川書店 2011.
- (18) 同上書 p. 14.
- (19) 結果として、政治経済学部学生が 41.1%、人間福祉学部学生が 34.1%、人文学部学生が 24.5% となり、政治経済学部に偏った。また、秋学期に実査をしたということもあり、回答者の学生は 1 年生 36.0%、2 年生 31.1%、3 年生 24.8%、4 年生 7.6% となり、4 年生が極端に少ない。さらに、性別については男性 69.8%、女性 30.8% となり、男性に偏った。国籍は日本人学生がほぼ 9 割、留学生が 1 割となった。
- (20) 聖学院大学政治経済学部政治経済学科『2012 年度専門演習・卒業研究 (アイデンティティの社会学) 調査報告書』2012 pp. 2-3.
- (21) ゆとり世代変数は、いじられても平気か (Q8)、他者への無関心 (Q10)、自分の性格はネガティブか (Q23)、気配りを意識するか (Q26)、反対されたら諦めるか (Q27)、他人からの指示 (Q28)、諦めが早いと言われるか (Q29)、疑問を言うか (Q30)、マニュアル志向 (Q31)、自分から挨拶するか

(Q32)を用意した。コミュニケーション能力変数には、新話題の展開(Q6)、企画力(Q9)、他人の趣味への興味(Q10)、付き合いのよさ(Q11)、会話の維持(Q14)、相手の性別を問わない会話(Q16/Q17)、自分の希望を言わない(Q13)、人見知り(Q22)、愛想のよさ(Q25)、指示待ち(Q30)を用意した。最後に、ネット(メディア)依存を示す変数として、即レス(Q1)、利用しているSNS(Q2)、SNS利用頻度(SQ3)、SNS利用目的(SQ4)、SNS利用での気持ちの変化(SQ5)を設定した。その他にフェイスシートとして、学部、学年、年齢、性別、国籍、居住形態を設けた。

# Are University Students Really Afraid of Loneliness? :

## Seigakuin University Students in 2012

Suzeri YOKOYAMA

### Abstract

---

This paper reveals independence in communications between Seigakuin University students which interdependent relations between friends tends to obscure.

Recently, several researchers have said that young people are dependent on friendships which are conducted through mobile phone mails and who are afraid of loneliness. However, personal research on 331 Seigakuin University students in 2012 showed them to be able to plan events and to initiate and carry on conversations independently, providing evidence that such students are not dependent on friends in communicating with others.

---

**Key words;** university students, friendship, LINE, communication